

〈書評〉

鈴木涼美著

『「AV女優」の社会学
——なぜ彼女たちは饒舌に自らを語るのか』

(青土社 2013年 306頁 ISBN: 978-4-7917-6704-5 1,900円+税)

張 瑋容



本書は「社会的想像力」を発揮し、個人的経験と構造的問題意識を繋げて「AV女優」の今を見据えようとする研究である。第一章で、著者は高校生の頃から、自分と地続きの日常に存在する性の商品化の現場を感じ、その現場に身を置く同世代の女性たちが自由意志とプライドを持ちながらも軽蔑され続けるというアンビバレントな姿を実見し、さらに、こうした同世代の女性たちを扱う「研究」では、彼女たちの現実の暗い側面ばかりが注目されることに違和感を覚えたと告白する。本研究は著者自身が経験したこうした幾重かの違和感から始まる。著者は、このアンビレンスを体現する代表的な存在として「AV女優」を捉えて対象化する。そして、「性行為」を見せて売ることと同様に、彼女たちが「AV女優になった動機を饒舌に語り続けること」そのものが性の商品化の現場に流通し続け、同時に、その動機が「自由意志」の存在を鍵に語られ続けることに着目し、問題化する。こうして問題化された課題を解明するために、著者は2004年から断続的にAV制作の仕事現場での参与観察と、AV女優およびその他の関係者に対するインタビュー調査を行い、AV女優たちに動機を語らせるインタビューなる現象そのものを問う作業を進める。ちなみに、著者は、語りの質を維持するために、極めて意図的にインタビュー調査の内容を録音しなかった。

第二章では、性の商品化と自由意志の複雑な関係性の観点からセックスワーク論の理論的背景が検討される。著者は従来の日本におけるセックスワーク研究を俯瞰し、セックスワーカーの自由意志の有無や可/不可能性によって、抽象的かつマクロな被害者像の構築と極度にミクロ化した当事者主義の主張に議論が二極化している現状を批判する。しかし、構造的強制vs.自由意志という二項対立を無効化することは著者の意図ではなく、むしろ、セックスワーカーが自由意志か否かと問われ続ける現状において彼女たちの存続を焦点化することこそが本書の目的である。

こうした問題意識に支えられたフィールドワークに基づいて、著者は、AV女優たちの動機語りと労働の日常経験との絡み合いに焦点を当て、その実相を第三章から第六章にかけて精緻に記述する。まず、著者はAV女優の仕事内容を詳述する上で、「面接」がAV女優という存在の形成にいかに重要な役割を担うかを検討する。AVのメーカーと専属契約を結ぶ単体女優、あるいはメーカーの依頼を受けるしかない企画女優のいずれの場合にも、彼女らは出演までに何回も面接を経験しなければならない。そして、面接の場のみならず、VTRの中でも、雑誌取材インタビューでも、彼女らは巧みに自分について語る。プロダクション、メーカー、監督、取材記者、さまざまな相手からAV女優が面接を受け続けることに注目した著者は、面接で自己を繰り返して語ることを通じて、AV女優が自分のキャラクターやストーリーを構築し、「AV女優としての姿」を獲得していく過程を描き出す。

次に、著者はインタビューに頻出する「この世界で上に行きたい」というAV女優の言葉に焦点を移

し、それと業界特有の複雑なAV女優のヒエラルキー構造の関連を論じる。著者によると、単体女優から企画女優への転身、出演内容・ジャンル・共演相手の多様化等々、時機に応じて千変万化するAV業界に固定した構造は無く、一枚岩的な価値判断基準も存在しない。だからこそ、AV女優には経歴と時代に応じて新しい価値を認識し、多様な価値構造の中で自分の位置づけを不断に更新してさらに「頑張る」根拠を獲得していくことが求められる。「AV女優になった理由」が「AV女優であり続け」る理由」に変質する過程は、自発的な「頑張り」を過剰化し、「頑張り」続けずにはいられない、「ホリック」なAV女優の自己成型の過程でもあるという著者の示唆は重要であろう。

しかし、AV女優の動機語りは単に自己像形成のためでもなければ、動機と結果を直線的に繋ぐ過程でもない。彼女らはその語りを常に内面化し、自由意志でAV女優として働き続ける動機を獲得し続けていく。著者はこの循環的な過程を「相互参照的なAV女優の語り構造」とし、こうした構造は意志と動機をもったAV女優を作る中核的な要素となっていると指摘している。しかし、この業界で重要視され、AV女優たちにも内面化される「エンタテインメント」という側面を視野に入れると、AV女優の動機語りを性の商品化の自由意志と直接に関係づけることの危険性も浮上してくる。なぜなら、芸能関係やモデル業などの側面が並存する本業界において、AV女優の演出は「エンタテインメント」の創出において価値づけられるため、実際にAV業界が与える売春の側面が見え難くなり、AV女優の性産業従事者としての意識の希薄化にも繋がるからである。性の商品化の自由意志を語る際、彼女たちの意志を性の商品化に対する意志と安易に同一視してはならないと著者は強調する。

最後の第七章では、著者は第一章に呼応して、AV女優の動機語りから見出される2つの要点を指摘する。1点目は、AV産業の特殊性を焦点化して明らかになった、自由意志の枠組みで性の商品化を語ることの限界である。2点目はAV女優が置かれる構造的立場のアンビバレンスであり、すなわち、自由意志でこの仕事を続ける動機を獲得しながらも、性行為なる仕事に携わっていることで軽蔑されるというAV女優たちのアンビバレントな立場を指している。結果として、饒舌に動機を語り、快樂と能動性を「エンタテインメント」の名の下で演出し続けるAV女優は、自由意志で語りきれないアンビバレンスを体現する装置として存続していると著者は本書を締め括る。

本書の全体を俯瞰したところで、まず著者の研究手法を高く評価したい。著者はインタビューを録音しないという手法を採用することで、インタビューを受けることが重要な業務であり、インタビュー自体が商品化されるAV女優とのインタビュー調査そのものを独自に文脈化している。著者は、AV女優と言葉を交わした個人的経験の感覚とその場のメモを重視することで、当事者の口調や会話のやりとりを注視して反芻することが叶い、性の商品化をめぐるアンビバレンスを記述して伝えるという作業に成功しているのだと評価したい。また、著者の個人的経験を活かした詳細な「現場」での記述は、性の商品化と自由意志の複雑な絡み合いが「現場」でのAV女優の語り体に体現される過程を明示することに成功している。

次に、著者がAV女優の動機語りについて、あえて「性行為」に特化しない部分を取り上げて分析するという特徴に注目したい。本書は性の商品化を扱う研究でありながら性行為そのものは前面化していない。この点は、従来のAV女優研究と比較してもっとも鮮明な差異となっている。これと対をなすのが「エンタテインメント」という鍵概念への着目である。つまり、「エンタテインメント」を極めるという動機が故にAV女優らは「きらきら」していると同時に、その内実を占める性行為の演出を二次的な存在に位置づけ、性行為が伴う負の評価から目を逸す作法を獲得することができるのも「エンタテインメント」だからである。この業界では当たり前になっている「エンタテインメント」の思考に焦点を

当てることで、これまで性の商品化に関する研究で注目されてこなかったAV産業の女性が「きらきらしている瞬間」を特定できただけでなく、「エンタテインメント」とAV女優が直面するアンビバレンスとの関係を分析できたのは、著者のこの独自の視点にほかならない。

しかし、アンビバレンスをめぐる分析をさらに深めるために、以下の3点を提言したい。1点目はAV女優とAV業界の再帰的關係性である。つまり、AV女優の饒舌な動機語りはどのようにAV業界における「価値観」のようなものを再生産していくのかということの説明できれば、アンビバレンスがこの世界にいかにか根強く存続するかも明らかになるだろう。

2点目はAV業界の全体を眺める視線である。著者が指摘しているように、「エンタテインメント」性の重視と強調はAV女優自身が性産業に携わっていることへの意識の希薄化と関係する。しかし、これとAV産業の特殊性——著者が本書の中で言及している「エンタテインメント」の次元の他に、AV産業においては金銭とセックスの交換が直接に性行為を行う当事者（＝からみのシーンを演じている者）の間で発生するものではなく、不特定多数の視聴者、ビデオ取扱店、事務所などの中で発生しているという側面——との関係に関する分析をもう少し深めれば、この業界におけるAV女優のアンビバレンスの独自性と複雑性がさらに明確になると考えられる。

3点目は、性行為自体に特化せずに、AV女優たちの体験への言及を試みていることに関わる。つまり、著者のオリジナルな視点を維持しながら、AV女優の動機語りの獲得において性行為と関わる体験の位置づけにも触れれば、性行為の演出に伴う快感と負の感覚を超えて「ホリック」の状態にまで至るといふアンビバレンスをAV女優の職業環境に位置づけて説明でき、著者が目的とした性の商品化と自由意志の複雑な関係もより精緻に分析できるのではないだろうか。

以上の3つが要再考点として指摘されるものの、AV女優がアンビバレントな立場に置かれながらもAV女優であり続けることの機序を解明したうえで、性の商品化と自由意志の複雑な関係性を独自の視点で論じた本書の功績は決して損なわれるものではない。最後に、構造的強制か自由意志であるかの二元論でセックスワークを論じるという従来の視点からの脱却を試みつつ、セックスワーカーの存在自体に直面することで「自由意志論」の射程を広げたという点で、本書がセックスワーク研究に分析視角の多様化をもたらしたことを高く評価したい。

付記：本稿を脱稿後、『週刊文春』（2014年10月9日号、pp.143-144.）に「日経新聞記者がAV女優だった！」という記事（『「AV女優」の社会学』の著者鈴木氏が元AV女優であることを暴露する内容）が掲載された。それに対し、鈴木氏はAV女優にまつわるアンビバレンス、及び研究者の当事者性問題への反省を内容とするコメントを公開した（<http://news.livedoor.com/article/detail/9327280/> 2014/10/30アクセス）。研究者自身の当事者性は常に問われる大きな課題である。調査対象との関係性や研究倫理の問題は言うまでもなく、分析の視角や方向性にも深く関係する。なぜなら、研究者自身の当事者性を焦点化することで論じ得るものもあれば、敢えて自己を他者化して突き放すことで見えてくるものもあるからだ。今回の記事に目を落としたうえで、評者は鈴木氏の著作に後者の可能性を見出すものである。これについては何れ別稿で論じたいと考えている。

（ちょう・いよう／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
ジェンダー学際研究専攻博士後期課程）